日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）21(2)：301. 2012.
第22回日本小児整形外科学会学術集会　主題

小児の骨腫瘍

座長：尾　﨑　敏　文

このセッションは小児骨腫瘍に焦点を絞ったものであった．最初の2題はLangerhans cell histiocytosis（Langerhans細胞組織球症）に関する報告，第3題めは線維性骨異形成症の大腿骨病変に対する治療成績，次に類骨骨腫に対する治療方法の検討が2題，そして演者らの教室における小児骨腫瘍症例の検討を行った演題で構成されていた．

Langerhans cell histiocytosis（LCH）症例に対して，近年日本LCH研究グループが化学療法のプロトコールを提示し，治療方法が確立されつつある．確定診断がつくと，整形外科だけでなく血液腫瘍内科や小児科との連携での治療が重要になる．脊椎病変の場合，初診時圧潰率は平均45%，最終診察時には74%であった．再発は20%程度の症例で認められた．

線維性骨異形成の大腿骨，特に近位部病変は変形が進行しやすく，対応に苦慮することが多い．髄内釘は大腿骨頚部内反変形の防止に有用とされているが，骨形態や年齢により適応に限界がある．

類骨骨腫は診断が難しいことがあり，症状発現から診断までに長期間を要する場合がある．発生部位では長管骨の骨幹部以外に大腿骨頚部などが有名である．治療としては腫瘍切除術が行われてきた．特に手術では病巣“nidus”の切除が重要である．近年は，治療法はより低侵襲化し，CTガイド下にラジオ波焼灼術などを行う方法が普及してきている．

骨腫瘍や骨腫瘍類似疾患は小児期を中心に発症するものが多い．小児に発症しやすい腫瘍をよく知っておくことと，炎症性疾患や疲労骨折などの鑑別すべき疾患を認識しておくことが重要である．